

# 「沖縄県の口腔癌・咽頭癌における HPV 感染、ポリ ADP リボース活性と予後との関連について」に関する研究

## 1. 研究の対象

昭和 61 年 (1986) から令和 2 年 (2020) までの 35 年間に琉球大学病院歯科口腔外科にて検査・手術を受けた口腔癌・咽頭癌症例で病理組織学的に扁平上皮癌と診断されている方。

## 2. 研究目的・方法

本研究では琉球大学病院で検査や手術で摘出された口腔癌・咽頭癌の病理組織標本を用いて Human papillomavirus (HPV) の感染と口腔癌の予後との関連について研究を行います。口腔癌・咽頭癌の HPV 感染と予後に関する報告は多数ありますが、殆どの報告は HPV が感染している口腔癌・咽頭癌は感染していないものより、5 年生存率、全生存率が良く、例え再発したとしても再発までの期間が長い等、全体的に予後の改善に関与する事が報告されています。HPV の感染が何故予後の改善に関わるかについても様々な検討が行われましたが、そのメカニズムはまだ解明されていません。

ところで私達は、マウスの胚線維芽細胞に HPV16 の E6 あるいは E7 遺伝子を発現させると E6 遺伝子を発現させた時のみ、様々なストレス時に誘導される PARP の活性が著しく亢進 (ポリ ADP リボシル化) していることを明らかにしました。この E6 発現によるポリ ADP リボシル化の亢進は、細胞の酸化ストレスと関連している事も見出しています。この事から私達は、HPV が感染した癌細胞は E6 発現によってすでに酸化ストレスに曝露されており、化学療法や放射線療法はより強力な酸化ストレスを癌細胞に加えることで、細胞死を誘発するのではないかと考えました。今迄述べてきたように HPV が感染している口腔癌・咽頭癌の予後が良い事が疫学的に明らかにされていますが、分子生物学的なメカニズムについては解明されていません。

本研究では、沖縄県の口腔癌・咽頭癌症例の HPV 感染と予後を調べ、さらに病理組織標本を用いて HPV16 E6 の発現、ポリ ADP リボシル化、酸化ストレス等を検討します。これらの検討により HPV が感染した口腔癌・咽頭癌の予後良好のメカニズムを明らかにしたいと考えています。私達の仮説が証明されれば、口腔癌・咽頭癌の治療戦略に重要な情報となるだけでなく、新たな治療法の開発にもつながる可能性があり、臨床的に有用な発見となる事が期待されます。

## 3. 研究に用いる試料・情報の種類

情報：生年月日、合併症、過去の手術歴、現在の内服薬、喫煙歴、臨床検査のデータ等  
試料：手術で摘出した組織

#### 4. お問い合わせ先

本研究に関するご質問等がありましたら下記の連絡先までお問い合わせ下さい。  
ご希望があれば、他の研究対象者の個人情報及び知的財産の保護に支障がない範囲内で、研究計画書及び関連資料を閲覧することが出来ますのでお申出下さい。

また、試料・情報が当該研究に用いられることについて患者さんもしくは患者さんの代理人の方にご了承いただけない場合には研究対象としないので、下記の連絡先までお申し出ください。その場合でも患者さんに不利益が生じることはありません。ただし、データ解析完了後や学会・論文発表後に、参加拒否のお申し出をなされた場合は対応し兼ねる事がございます。予めご了承ください。

照会先および研究への利用を拒否する場合の連絡先：

琉球大学医学部保健学科 田邊恭佳

〒903-0215 沖縄県西原町字上原207番地

Tel：098-895-3331(内線2677)

Fax：098-895-1434

研究責任者：

琉球大学医学部保健学科形態病理学分野 金城貴夫

〒903-0215 沖縄県西原町字上原207番地

Tel：098-895-1278,

Fax：098-895-1434

Mail：kinjotko@med.u-ryukyu.ac.jp